

国立歴史民俗博物館総合展示 第1室(原始・古代)の新構築事業

2012 年度活動報告

Renovation Project of the Permanent Exhibition Gallery One (Prehistoric and Early Japan)
of the National Museum of Japanese History : FY 2012 Activity Report

SHIBUTANI Ayako

渋谷綾子

はじめに

本稿は、国立歴史民俗博物館総合展示第1室新構築事業（以下、第1室リニューアルと略）における2012年度の活動記録である。本稿の目的は、第1室リニューアルの準備状況や展示リニューアル委員会の概要を示すことで、現在の展示意図や構想、展示構成について可能な限り精緻な記録を残すことにある。展示更新された第1展示室は2016年度に旧石器時代から弥生時代まで、2017年度に古墳時代・古代が開室となる。開室後は各展示をめぐる学界の内外で広く議論が起こることが予想されている。そのため、展示を構築する過程でどのような議論があり、どのような研究成果に依拠して展示が構成されているのか、新構築事業に関する活動を記録し、明示することが必要となる。

筆者は、2012年度後半より第1室リニューアル事業を担当する特任助教の立場でこの事業に携わっており、この約半年間における展示更新の活動を整理するとともに、総合展示第1室リニューアルが今後どのような計画で進められていくのか、展示方法や方針についても報告する。なお、後述する展示プロジェクト委員の敬称は略している。

1 総合展示第1室リニューアルの経緯と目的

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は1981年に国立大学共同利用機関（1989年に大学共同利用機関と改称）として設置され、1983年に開館、2013年3月には開館30周年を迎えた。歴博は設置当初から、21世紀に向けて日本の歴史と文化に関する総合的研究を推進するための有効な形態としての「博物館」であること、博物館を適切に運営するために、大学を中心とする全国の研究者と共同して調査研究・情報発信等を進める体制が制度的に確保された「大学共同利用機関」であること、という2つの機能を有してきた〔平川、2013〕。

2004年の法人化とともに、歴博は大学共同利用機関法人人間文化研究機構を構成する研究機関の1つとなり、基幹としての存在意義をより一層明確にすることが各方面から求められた。そのため、2007年に新たな理念と基本方針として、設置当初の2つの機能（博物館と大学共同利用機関

という形態)を改めて立脚の原点と位置付け、新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することとなった〔国立歴史民俗博物館, 2013〕。「博物館型研究統合」とは、資源、研究、展示の3つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の幅広い人びとと共有・公開することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進するものである。あわせて「共同利用性の充実」を図ることによって、共同利用機関としての使命と社会との強固な接点を活かした研究が推進できること、いわば新しい展示概念の提唱も歴博では行ってきた〔平川, 2013〕。

法人化の直前には「国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画」(以下、「総合展示リニューアル基本計画」)を策定し、3つの基調テーマ(生活史、環境史、国際交流)と2つの視点(多様性、現代的視点)を設定した。この計画に基づいて、2008年に第3展示室(近世)、2010年に第6展示室(現代)、2013年3月に第4展示室(民俗)をリニューアル・オープンした。

今後、歴博では学術研究の進展と社会的要請に適確かつ迅速に対応し、総合展示を間断なく新構築することが重要となる。総合展示に研究成果を常に反映させるための共同研究は、現代的視点に立って取り組み、従来の研究分野の枠組みを超えて人文・社会科学と自然科学の協業体制をより一層充実させることが肝要となる。また、歴博は国際社会の中で、日本の歴史・文化を的確に情報発信していくことが求められている。そのためには新構築した総合展示を根幹とする歴史叙述とともに、海外の博物館と学術交流協定にもとづく共同研究の成果を、歴博と海外の博物館との国際展示として開催するなど、新しい展開が必要となる〔国立歴史民俗博物館, 2013〕。

歴博が第1展示室を一般公開したのは1983年3月である(以下、第Ⅰ期展示)。その後、1984年3月に沖ノ島の展示を公開し、1988年に「日本文化のあけぼの」を公開した。以来、日本文化のあけぼの、稲と倭人、前方後円墳の時代、沖ノ島、律令国家という5つのテーマに沿って日本列島の原始・古代の特徴を展示してきた。第Ⅰ期展示の10年後となる1994年には第Ⅱ期展示の計画を策定し、1996年3月から1997年3月に暫定改善を実施し、一般公開した。この暫定改善では中テーマ以上の構成には手を入れず、展示パネルや展示資料の入れ替えなど部分的な更新によって、国際交流などの視点を反映しようとしたものであった〔藤尾, 2012〕。

そこで、総合展示の全面的な再構築を新たに実現するため、2004年「国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画」の策定後、他の展示室とともに第1室リニューアルの準備を進めてきた。2011年度から2012年度にかけて本格的な準備作業が始まり、2012年度には館内・館外の委員から構成される展示リニューアル委員会が発足した。

その後、近年の考古学研究の進展によって、総合展示に反映させる必要性が出てきた。歴博では1993年頃から土器に付いているススや煮焦げを対象に、高精度のAMS—炭素14年代測定を5千点ほど実施し、縄文時代は従来の年代観よりも約2千年、弥生時代は約5百年、早く始まっていたことを明らかにした。さらに、古墳時代の幕開けを告げる箸墓古墳も、3世紀中ごろには出現していたことを科学的に突き止めた〔大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2011〕。これらの結果にもとづいて現在、これまでの年代表記を改めつつ、新しくなった年代観にもとづいた縄文・弥生文化観の見直しが進んでいる。さらに、後述する基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」(2009～2011年度、代表:藤尾慎一郎)と「古代列島世界の歴史像の再構築」(2012～2014年度、代表:林部均)などの最新の研究成果をふまえ、文化や社会観の変化を反映した総

合展示の見直しが不可欠となっている。

本稿では、こうした総合展示リニューアルの概要とともに、第1室リニューアルのこれまでの活動について報告する。

2 総合展示リニューアルの基本原則、基調テーマ・視点

歴博の総合展示リニューアルでは、21世紀における新たな歴史像の再構築と国際化への接近を基本理念としている。このような基本理念を実施計画の根幹に据え、下記の基調テーマと視点が設定された[大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2004]。

1) 基本原則

総合展示リニューアルは、歴博の研究成果、所蔵資料および展示施設の有効活用を図ることを基本とする。

(1) 研究成果の反映

歴史研究の専門機関として、人文・社会科学と自然科学の幅広い学問分野の協業や最新の研究設備により生み出される質の高い研究成果をタイムリーに国内外に公開できるように努める。

(2) 国際化への対応

国内外の歴史認識が変動することによって、さまざまな軋轢が生じる中で、歴史認識に対する国家間の相互理解を推進するために、より一層の実証性の高い展示を行う。

(3) 生涯学習等一般公衆の知的需要への対応

一般公衆の多様な知的需要に応えるために、多角的で理解しやすい展示手法を実現する。

総合展示リニューアルでは展示施設の増築は行わず、主室と副室に機能的に使い分けることによってそれぞれの目的に応じた展示スペースを設ける。そのため、主室の展示工事を主に実施することとなる。

2) 基調テーマと視点

(1) 基調テーマ

総合展示リニューアルの基調テーマは、生活史、環境史、国際交流の3つである。

生活史では、人びとの暮らしに関する衣食住、家族、交通などの基本的な文化要素を通史的に整理し、これに社会的、政治的事象を加えることによって社会生活の歴史を再現する。環境史については、環境復元を主とする学際的な研究を駆使することによって、自然と人間との複雑な関係を時空的に統合する。また国際交流については、日本の歴史と文化の国際性を世界史の中で位置づけるとともに、諸外国との対立・協調という二面性を展示に反映させる。

(2) 視点

多様性（マイノリティーの視点）と現代的視点の2つである。多様性は、日本列島における少数民族、身分や階層、性差・年齢差などの歴史と文化をマイノリティーの立場から新たに解明するものである。また現代的視点については、現代的視点による歴史観を新たに創出し、この視点を展示スペース全体に及ぼすことによって歴史的課題への総合的な理解を深めることを

めざす。

以上の基調テーマと視点を設定することによって、歴博では事業内容の統一化と具体化を図り、円滑なりニューアルの実施を進めてきた。これまで第3展示室（2008年）、第6展示室（2010年）、第4展示室（2013年）をリニューアルし、一般公開している。

3 第1室リニュアルに関連するこれまでの活動

総合展示第1室リニュアルは、2004年「総合展示リニュアル基本計画」の策定後、他の展示室とともに準備が始まり、2011・2012年度から本格的な活動が始まった。2012年度には、館内・館外合わせて26名の委員から構成される展示リニュアル委員会が発足した。総合展示リニュアルの目的とあわせて、第1室リニュアルは次の3項目を主要な目的としている〔藤尾, 2012〕。

- (1) 大学共同利用機関として先端的な歴史研究を推進し、その研究成果を公開する。
- (2) 考古学の進展による歴史観の劇的な変化に対応する。
- (3) 博物館型研究統合の実践を行う。

さらに、下記のように、1997年度以降現在も継続中である共同研究、科学研究費助成事業、企画展の研究成果と連動する形で、第1室リニュアルの準備を進めてきた（表1、図1）〔大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2013〕。これらの研究成果はそれぞれ、『国立歴史民俗博物館研究報告』および学術誌へ論文として発表したうえで今回のリニュアルに反映させる方針で展示構成案に取り入れられている。

<共同研究>

(1) 新しい年代観に関する共同研究

- 基盤研究「縄文時代の高精度編年研究」（1997～1999年度）
- 基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合研究」（2003～2005年度）
- 基盤研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合研究」（2006～2008年度）
- 基盤研究「歴史・考古資料研究における高精度年代論」（2009～2011年度）

(2) 旧石器・縄文・弥生時代に関する共同研究

- 基幹研究「旧石器時代の環境変動と人間生活」（2009～2011年度）
- 基幹研究「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」（2009～2011年度）
- 基幹研究「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」（2012～2014年度）
- 基盤研究「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」（2005～2007年度）
- 個別共同研究「愛媛県上黒岩遺跡の研究」（2007～2009年度）
- 個別共同研究「東アジア先史時代の定住化家庭の研究」（2007～2009年度）
- 開発型共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」（2010～2012年度）

(3) 古墳時代・古代に関する共同研究

- 基幹研究「6世紀墓制にみる倭の対外交流と文化変容の比較」（2005～2007年度）
- 基幹研究「『三国志』魏書東夷伝の国際環境」（2005～2007年度）
- 基幹研究「古代における生産権力とイデオロギー」（2005～2007年度）

基幹研究「交流と文化変容に関する史的研究」人間文化研究機構連携研究（2005～2009年度）
基幹研究「新しい古代像樹立のための総合的研究」（2009～2011年度）
基幹研究「古代における文字文化形成過程の総合的研究」（2010～2012年度）
基幹研究「東アジアにおける倭世界の実態」（2010～2012年度）
基幹研究「古代地域社会の実像」（2012～2014年度）
基盤研究「建築と都市のアジア比較文化史」（2009～2011年度）
基盤研究「古代日本と古代朝鮮の文字文化に関する基盤的研究」国際共同研究（2009～2012年度）
個別共同研究「律令国家転換期の王権と都市」（2002～2004年度）
準備研究「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」（2008～2009年度）
「総合展示第一室新構築に向けての準備研究」（2011年度）
「正倉院文書の高度情報化研究」人間文化研究機構連携研究（2010～2014年度）

(4) 環境史・生活史に関する共同研究

「東アジアにおける多様な自然利用—水田農耕民と焼畑農耕民—」（2004～2006年度）

<研究報告>

「律令国家転換期の王権と都市〔論考編〕」134集（2006年度刊行）
「律令国家転換期の王権と都市〔資料編〕」135集（2006年度刊行）
「高精度年代測定を活用による歴史資料の総合的研究」137集（2006年度刊行）
「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」149集（2009年度刊行）
「『三国志』魏書東夷伝の国際環境」151集（2008年度刊行）
「古代における生産権力とイデオロギー」152集（2008年度刊行）
「愛媛県上黒岩遺跡の研究」154集（2009年度刊行）
「東アジア先史時代の定住化過程の研究」172集（2011年度刊行）
「縄文時代の人と植物の関係史（仮）」（2013年度刊行予定）
「新しい古代国家像のための基礎的研究（仮）」（2013年度刊行予定）
「農耕社会の成立と展開—弥生長期編年下の新しい弥生像—（仮）」（2013年度刊行予定）

<資料図録・目録>

「落合計策縄文時代遺物コレクション」（2001年度刊行）
「瓦コレクション」（2005年度刊行）
「弥生青銅器コレクション」（2008年度刊行）
「古墳関連資料」（2011年度刊行）
「先史時代遺物コレクション（仮）」（2014年度刊行予定）
「直良信夫コレクション目録」（2008年度刊行）

<展示>

「新弥生紀行—北の森から南の海へ—」（1999年度）
「縄文文化の扉を開く—三内丸山遺跡から縄文列島へ—」（2000年度）
「北の島の縄文人—海を越えた文化交流—」（2000年度）
「古代日本文字のある風景」（2002年度）

-
- 「はにわ一形と心一」(2003年度)
「歴史をさぐるサイエンス」(2003年度)
「海をわたった華花—ヒョウタンからアサガオまで—」(2004年度)
「水辺と森と縄文人—低湿地遺跡の考古学—」(2005年度)
「縄文 VS 弥生」(2005年度)
「弥生はいつから！？—年代研究の最前線—」(2007年度)
「長岡京遷都」(2007年度)
「縄文はいつから！？—1万5千年前になにがおこったのか—」(2009年度)
「アジアの境界を越えて」(人間文化研究機構連携展示, 2010年度)
「古代東アジアの文字文化(仮)」(2014年度開催予定)
「贗造と模倣の文化史(仮)」(2014年度開催予定)
「弥生ってなに！？—弥生文化の範囲—(仮)」(2014年度開催予定)

<フォーラム>

- 「倭人とその世界—2000年前の多様な暮らし—」(1999年度)
「水辺と森と縄文人」(2005年度)
「弥生の始まりと東アジア」(2005年度)
「漆の文化と日本の歴史」(2006年度)
「縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—」(2006年度)
「激動の長岡京時代」(2007年度)
「縄文はいつから！？」(2009年度)
「アジアの境界を越えて」(2010年度)
「ここまでわかった！縄文時代の植物利用」(2012年度)

<国際シンポジウム・国際研究集会>

- 「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」(1997年度)
「AMSと考古学」(2002年度)
「弥生時代の実年代」(2002年度)
「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」(2002年度)
「弥生農耕の起源と東アジア」(2004年度)
「百済の国際交流—武寧王陵の最新研究をめぐって—」(2005年度)
「日韓古墳時代の年代観」(2006年度)
「日韓古墳・三国時代の年代観(Ⅱ)」(2007年度)
「日韓における古墳・三韓時代の年代観(Ⅲ)」(2009年度)
「古代日本と古代朝鮮の文字文化交流」(2012年度)

<大型科研(基盤A以上)>

- 基盤A「ヒノキ・スギ等の年輪年代による炭素14年代の修正」(佐原真他, 1999～2001年度)
基盤A「縄文・弥生時代の高精度編年体系の構築」(今村峯雄他, 2001～2003年度)
学術創成「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(西本

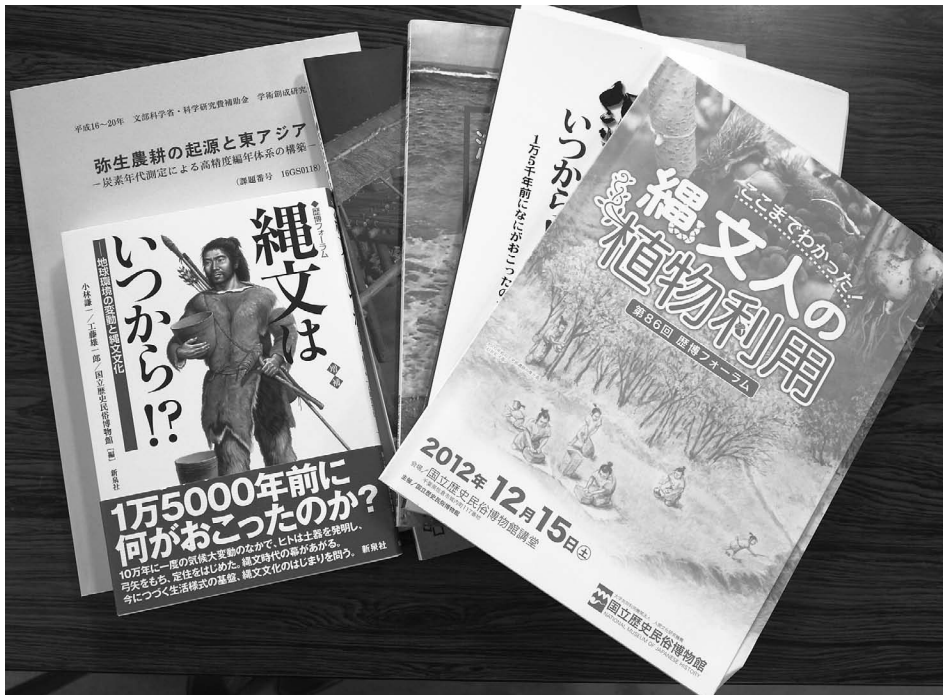
豊弘他, 2004～2008年度)

基盤 A「霞ヶ浦沿岸花室川流域の旧石器文化の研究」(西本豊弘他, 2009～2011年度)

基盤 A「古代における文字文化の総合的研究」(平川南他, 2010～2014年度)



共同研究の成果をまとめた論文が掲載された「国立歴史民俗博物館研究報告」



企画展示図録, 歴博フォーラム, 大型科研の研究成果報告書

図1 総合展示第1室リニューアルにかかわる共同研究・企画展示等の成果物

表1 総合展示第1室（原始・古代）に関連する共同研究・企画展示等について

		1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014 (年度)	
共同研究	基盤研究	●新しい年代観に関する共同研究																		
		縄文時代の高精度編年研究																		
		高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合研究																		
	基幹研究	●旧石器・縄文・弥生時代に関する共同研究																		
		旧石器時代の環境変動と人間生活 農耕社会の成立と展開 —弥生時代像の再構築—																		
		先史時代における社会腹圧化・地域多様化の研究																		
	基盤研究	縄文・弥生集落遺跡の集成的研究																		
	個別共同研究	愛媛県上黒岩遺跡の研究																		
	開発型共同研究	東アジア先史時代の定住化過程の研究																		
		縄文時代の人と植物の関係史																		
	基幹研究	●古墳時代・古代に関する共同研究																		
		6世紀嘉制にみる倭の対外交流と文化変容の比較																		
		『三国志』魏書東夷伝の国際環境																		
古代における生産権力とイデオロギー																				
人間文化研究機構連携研究「交流と文化変容に関する史的研究」																				
新しい古代像樹立のための総合的研究																				
古代における文字文化の総合的研究																				
東アジアにおける倭世界の実態																				
古代地域社会の実像																				
基盤研究		建築と都市のアジア比較文化史																		
個別共同研究	国際共同研究「古代日本と古代朝鮮の文字文化に関する基盤的研究」																			
	律令国家転換期の王権と都市																			
準備研究	古代における文字文化の形成過程の基礎的研究																			
	総合展示第1室新構築にむけての準備研究																			
機構関連共同研究	人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」																			
科研費	●環境史・生活史に関する共同研究																			
	東アジアにおける多様な自然利用 —水田農耕民と焼畑農耕民—																			
	●大型科研（基盤研究 A 以上）																			
	基盤 A「ヒノキ・スギ等の年輪年代による炭素 14 年代の修正」(佐原真他)																			
	基盤 A「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」(今村峯雄他)																			
	学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」(西本豊弘他)																			
	基盤 A「古代における文字文化の総合的研究」(平川南他)																			

	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014(年度)
研究報告										「律令国家転換期の王権と都市」[論考編]」134集		「『三国志』魏書東夷伝の国際環境」151集	「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」149集		「東アジア先史時代の定住化過程の研究」172集		「縄文時代の人と植物の関係史(仮)」	
										「律令国家転換期の王権と都市」[資料編]」135集		「古代における生産権力とイデオロギー」152集	「愛媛県上黒岩遺跡の研究」154集				「新しい古代国家像のための基礎的研究(仮)」	
										「高精度年代測定による歴史資料の総合的研究」137集							「農耕社会の成立と展開—弥生長期編年下の新しい弥生像—(仮)」	
資料目録・図録					「落合計策縄文時代遺物コレクション」				「瓦コレクション」			「弥生青銅器コレクション」			「古墳関連資料」			「先史時代遺物コレクション(仮)」
												「直良信夫コレクション目録」						
企画展示等			新弥生紀行—北の森から南の海へ—	縄文文化の扉を開く—三内丸山遺跡から縄文列島へ—			古代日本文字のある風景	はにわ—形と心—	海をわたった華花—ヒョウタンからアサガオまで—	水辺と森と縄文人—低湿地の考古学—		弥生はいつから!?—年代研究の最前線—		縄文はいつから!?—1万5千年前になにがおこったのか—	アジアの境			古代東アジアの文字文化(仮)
				北の島の縄文人—海を越えた文化交流—				歴史をさぐるサイエンス		縄文VS弥生		長岡京遷都						厩造と模倣の文化史(仮)
																		弥生ってなに!?—弥生文化の範囲—(仮)
フォーラム			倭人とその世界—2000年前の多様な暮らし—						水辺と森と縄文人	漆の文化と日本の歴史	激動の長岡京時代		縄文はいつから!?	アジアの境		ここまでわかった!縄文時代の植物利用		
									弥生時代の始まりと東アジア	縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究成果—								
国際シンポジウム・国際研究集会	過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史					AMSと考古学		弥生農耕の起源と東アジア	百済の国際交流—武寧王陵の最新研究をめぐって	日韓古墳時代の年代観	日韓古墳・三国時代の年代観(Ⅱ)		日韓における古墳・三韓時代の年代観(Ⅲ)			古代日本と古代朝鮮の文字文化交流		
						弥生時代の実年代												
						古代東アジアにおける倭と加耶の交流												

以上の研究活動と同時進行の形で、各展示テーマの構成や展示資料の選定などの準備作業が続いている。この作業で作られた展示の基本構成案にもとづき、2013年度には全体設計（館内での基本設計）を作成し、2014年度に旧石器時代から弥生時代までの実施設計を実施、2015年度に古墳時代・古代の実施設計を行う予定である。

4 第Ⅰ期展示の課題

第1室は主にアジア世界から列島世界の歴史のうち、3万7千年前から10世紀までを扱い、日本列島の原始・古代の特徴を展示する。第Ⅰ期展示では、(1) 日本文化のあけぼの、(2) 稲と倭人、(3) 前方後円墳の時代、(4) 律令国家、(5) 沖ノ島（副室）が大テーマであり（図2）、展示テーマは国史的な内容が中心となっていた。しかし、最新の研究成果を反映させる総合展示の見直しとあわせると、第Ⅰ期展示の課題が見えてきた。第Ⅰ期展示の課題は下記の5点である〔藤尾, 2012〕。

- ① 民衆生活史が(1)から(5)の部屋で一貫していないこと。
- ② 時代の中で印象的な展示物が並べられ、画期をつなげただけのモニュメント展示となっていること。例として、縄文土器、高床倉庫の模型、箸墓古墳の模型、羅城門の模型が挙げられる。
- ③ 暫定改善の際に展示パネル等によって、総合展示リニューアルの基本原則の1つである「国際化への対応」について部分的な解消を図ったが、朝鮮半島などの国際関係についての内容が依然として希薄であること。
- ④ 日本列島の北（北海道）と南（沖縄）の展示が欠落していること。これについては、1999年度企画展「新弥生紀行」で扱っており、今回のリニューアルで展示として実施する必要がある。
- ⑤ 最新の研究成果を反映することが難しい固定展示のため、主室と副室の機能的な使い分けが不十分であること。今回のリニューアルでは副室を有効活用し、新しい研究情報を発信することができる可動的な展示へ変更する必要がある。

以上の第Ⅰ期展示の課題をふまえて、2004年の「総合展示リニューアル基本計画」では、(1) 列島環境への対応（旧石器時代～縄文時代中期）、(2) 食料生産とたたかい（縄文時代後期～弥生時代中期）、(3) 倭国への道（弥生時代後期～古墳時代前期）、(4) ヤマトに吹く異国の風（古墳中・後期）、(5) 日本国家の建設（7～9世紀）、が新しい展示テーマ案となり、新たに生活史のテーマが取り入れられた〔大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2004〕。2011・2012年度には基本的な構成案を作り、2012年度からは展示資料の選定とともに検討を続けている。

5 第1室リニューアル展示の基本的構成案

第1室リニューアルの基本的な展示構成案は第Ⅰ期展示の課題をふまえて作られており、2012年度に展示リニューアル委員会が発足した後はリニューアル委員会と館内委員会の双方で検討を行っている。

新しい展示構成案では、国史的な内容よりもむしろ人類史的な内容に重点を置いている。展示では3万7千年前から10世紀までを扱うが、展示テーマを時代ごとに区分するのではなく、東アジア



プロローグ



「日本文化のあけぼの」その1



「日本文化のあけぼの」その2



「稲と倭人」



「前方後円墳の時代」



「律令国家」



「沖ノ島」

図2 第1室の展示見取図と各展示スペースの様子 (2013年4月撮影)

アの動向と連動した形で大テーマⅠ～Ⅵに分け、それぞれ扱う時期をⅠ旧石器時代～縄文時代草創期、Ⅱ縄文時代早期～晩期、Ⅲ弥生時代早期～中期前半、Ⅳ弥生時代中期後半～後期、Ⅴ古墳時代前期～後期、Ⅵ飛鳥時代～奈良時代としている。副室では日本列島の北と南の展示、時期の推定や産地同定等の考古学の方法論、ミニ企画展を行い、研究成果の新しい情報を随時反映できる可動的な展示を行う計画である。

2013年4月時点での展示テーマ案は下記のとおりであり、基本構成の平面図案は図3のとおりである。

＜リニューアル後の展示基本構成案＞2013年4月時点

Ⅰ 最終氷期に生きた人々

- Ⅰ-1 最終氷期の環境
- Ⅰ-2 ホモ・サピエンスの拡散と列島最初の人々
- Ⅰ-3 狩猟採集民とその遊動生活
- Ⅰ-4 狩猟採集民の道具と動植物利用
- Ⅰ-5 祈り
- Ⅰ-6 最終氷期の土器と環境激変期の人々

Ⅱ 多様な縄文世界

- Ⅱ-1 縄文時代とはなにか？
- Ⅱ-2 技術開発と資源の利用
- Ⅱ-3 日々の生活
- Ⅱ-4 おそれ・いのり・まつり
- Ⅱ-5 ヒト・モノの動きと交流

Ⅲ 弥生文化誕生

- Ⅲ-1 朝鮮半島の首長制社会化と弥生文化誕生
- Ⅲ-2 農耕社会の成立
- Ⅲ-3 東と西のマツリー日本型青銅器の創造と青銅器祭祀の開始ー
- Ⅲ-4 4つの文化へー弥生文化とは何か

Ⅳ 倭人、倭国の登場

- Ⅳ-1 中国王朝の世界
- Ⅳ-2 三韓の世界
- Ⅳ-3 南北市糴の世界
- Ⅳ-4 九州北部の世界
- Ⅳ-5 九州以東の世界

Ⅴ 東アジアと倭

- Ⅴ-1 前方後円墳と倭王権
- Ⅴ-2 地域社会の景観
- Ⅴ-3 倭の境界と周縁
- Ⅴ-4 境界を越えてーアジアという世界ー

Ⅵ 古代国家と列島社会

Ⅵ-1 列島社会の自然環境

Ⅵ-2 倭国から日本へ

Ⅵ-3 律令支配と列島社会

なお、2013年8月にテーマ名と構成の一部が変更となった。現在の展示テーマ案は下記のとおりである。

I 最終氷期に生きた人々

I-1 最終氷期の環境

I-2 ホモ・サピエンスの拡散と列島最初の人々

I-3 狩猟採集民とその遊動生活

I-4 最終氷期の土器と環境激変期の人々

Ⅱ 多様な縄文世界（列島）

Ⅱ-1 縄文時代とはなにか？

Ⅱ-2 技術開発と資源の利用

Ⅱ-3 日々の生活

Ⅱ-4 おそれ・いのり・まつり

Ⅱ-5 ヒト・モノの動きと交流

Ⅲ 弥生文化誕生

Ⅲ-1 東北アジアの文明化と朝鮮半島，日本列島の農耕社会化

Ⅲ-2 農耕社会の成立

Ⅲ-3 東と西のマツリ

Ⅲ-4 4つの文化へ

Ⅳ 倭の登場

Ⅳ-0 東夷世界へのまなざし

Ⅳ-1 中国王朝の世界

Ⅳ-2 朝鮮半島の世界

Ⅳ-3 南北市糴の世界

Ⅳ-4 九州北部の世界

Ⅳ-5 九州以東の世界

Ⅳ-6 魏志倭人伝の航海記録

V 倭の前方後円墳と東アジア

V-1 前方後円墳と倭王権

V-2 地域社会の景観

V-3 倭の境界と周縁

V-4 境界を越えて—アジアという世界—

Ⅵ 古代国家と列島社会

Ⅵ-1 列島社会の自然環境

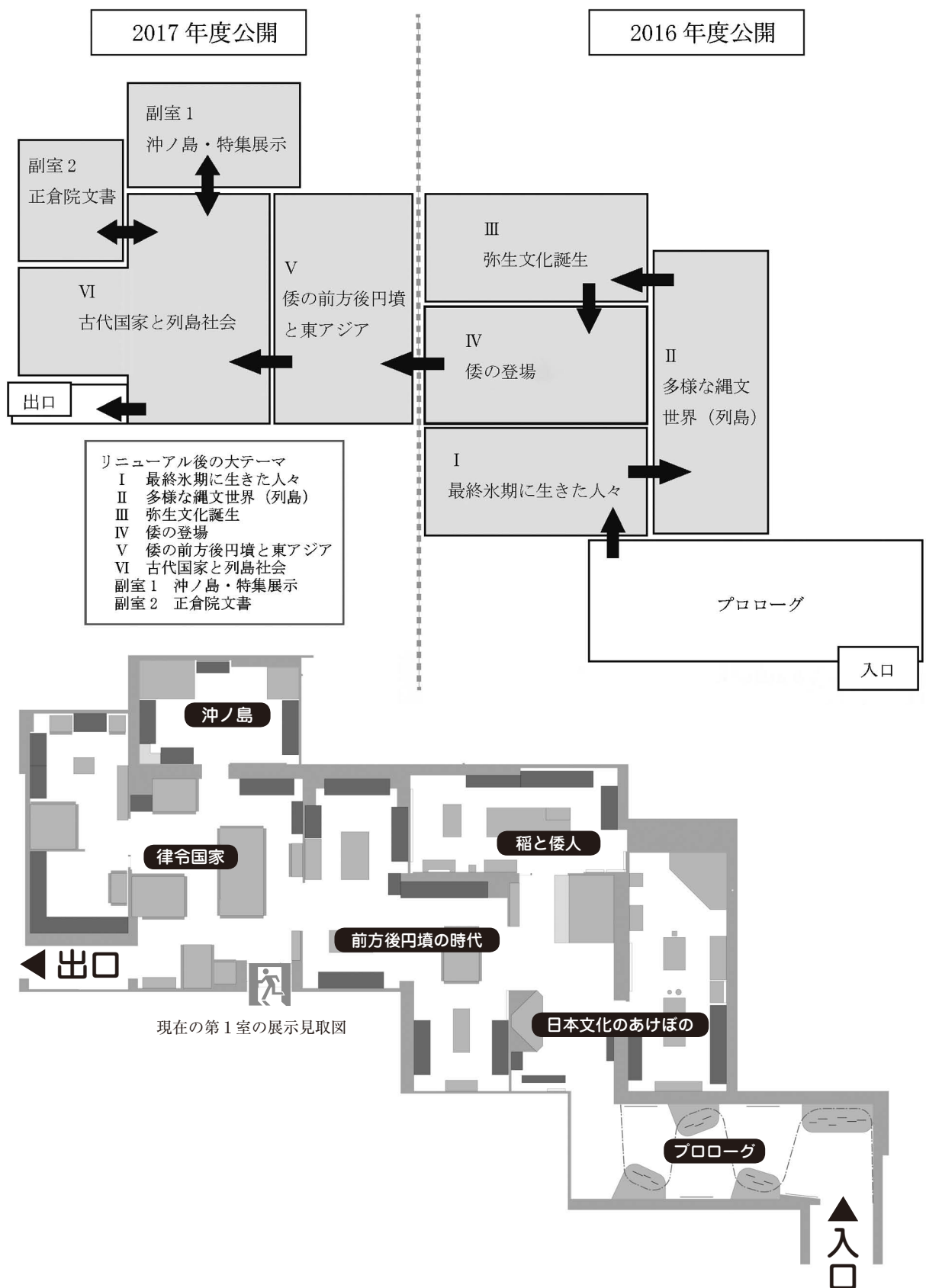


図3 第1室リニューアル展示の基本的な構成案

-
- VI-2 倭国から日本へ
 - VI-3 律令支配と列島社会
 - VI-4 中世の胎動

6 2012年度の活動概要と今後の予定

1) 2012年度の活動概要

2012年度は展示構成案の検討が中心となり、複製品や大型模型などの製作も含めた展示資料の検討、予算申請などの検討を行った。展示構成案と展示資料、予算申請については館内委員会で詳細な検討を行った後、2度の展示リニューアル委員会にはかり、館外委員の意見を得た。それをもとに現在も検討を続けている。さらに、2013年度から複製品や大型模型の製作を本格的に開始するため、各資料の所蔵機関との事前調整も実施した。

【第1室リニューアル委員会】

全体会議（国立歴史民俗博物館で開催）

・2012年8月18日・19日

議事：代表・副代表の選出、総合展示第1室リニューアルの経緯説明、各テーマの展示構成案の検討

・2013年1月19日・20日

議事：展示全体の統一方針の提案、各テーマの展示構成案・展示資料の検討、開室までの予定、今後の実施計画について

館内委員会（筆者は8月より参加）

・2012年8月30日、10月1日・29日、11月19日、12月10日、2013年2月18日、3月11日

議事：各テーマの展示構成案・展示資料の検討、予算申請の検討、今後の実施計画について

【総合展示リニューアル運営会議】（筆者は第5回より参加）

第5回 9月28日

・第1回リニューアル委員会の協議内容についての報告

第6回 10月26日

・第1回リニューアル委員会の結果を受けた館内委員会の予定について

第7回 11月16日

・10月29日の館内委員会についての報告

第8回 12月28日

・第2回リニューアル委員会の実施予定について

第9回 1月25日

・第2回リニューアル委員会の協議内容についての報告、2013年度の活動予定（各テーマにおける詳細な検討、2回のリニューアル委員会の実施）について

第10回 3月1日

・展示構成・予算の検討結果についての報告、展示工事のメと開室予定について

第11回 3月22日

・展示構成・予算・大型模型の保管場所等の検討結果についての報告

2) 今後の活動予定

リニューアルした第1室は、大テーマⅠからⅣの旧石器時代から弥生時代までの展示が2016年度に一般公開する予定であり、2017年度には大テーマⅤ・Ⅵの古墳時代と古代を一般公開することとなる。リニューアル・オープンに向けた準備として、2013年度の活動は展示構成の全体設計（館内での基本設計）を作成する作業が中心となる。各テーマにおける構成内容、いわゆるグランドデザインを確定し、展示資料の選定と複製品・大型模型の製作を進める予定である。

2013年度末にはこの全体設計のプロポーザルを行って実施設計図作成業者を選定し、2014年度より大テーマⅠからⅣの実施設計を行う。大テーマⅤ・Ⅵについては2015年度前半に実施設計図作成業者を選定し、2015年度後半から実施設計を行う。これらの実施設計の作成後は、大テーマⅠからⅣについては2015年度に展示工事を行い、2016年度に一般公開する。ⅤとⅥは2016年度に展示工事を行い、2017年度に一般公開する。

全体設計から実施設計にいたるまでの間、2014年度においては企画展「弥生ってなに!?」や「古代東アジアの文字文化」を開催する。これらの成果は第1室リニューアルの展示構成、特に大テーマⅢ・ⅣとⅥの内容に反映させる予定である。

7 第1室リニューアル展示プロジェクト委員

第1室展示プロジェクト委員は下記のとおりである。所属・役職については2013年4月時点のものである。

<館内>

藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	教授（代表）
林 部 均	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	教授（副代表）
上 野 祥 史	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	准教授
小 倉 慈 司	国立歴史民俗博物館	研究部歴史研究系	准教授
工藤雄一郎	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	准教授
鈴 木 卓 治	国立歴史民俗博物館	研究部情報資料研究系	准教授
高 田 寛 太	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	准教授
西 谷 大	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	教授
仁 藤 敦 史	国立歴史民俗博物館	研究部歴史研究系	教授
村 木 二 郎	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	准教授
山 田 康 弘	国立歴史民俗博物館	研究部考古研究系	准教授
渋谷 綾 子	国立歴史民俗博物館	研究部	特任助教
大塚 宜 明	国立歴史民俗博物館	機関研究員	（2013年6月～）

<館外>

小畑 弘 己	熊本大学文学部	教授
亀 田 修 一	岡山理科大学総合情報学部	教授

川 尻 秋 生 早稲田大学文学学術院 教授
設 楽 博 己 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 教授
瀬 口 眞 司 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 企画調査課 副主幹
谷 口 康 浩 國學院大學大学院文学研究科 教授（2013 年度から委嘱）
堤 隆 浅間縄文ミュージアム 主任学芸員
菱 田 哲 郎 京都府立大学文学部 教授
松 木 武 彦 岡山大学文学部・大学院社会文化科学研究科 教授
森 公 章 東洋大学文学部 教授
吉 田 広 愛媛大学ミュージアム 准教授
若 狭 徹 高崎市教育委員会文化財保護課 係長
若 林 邦 彦 同志社大学歴史資料館 准教授

8 おわりに

2012 年度は第 1 室リニューアル委員会を開催した 8 月以降に具体的な作業，特に展示構成案や展示資料の検討，予算の調整などの活動が本格的に始まった。また 2012 年度末には 2014 年度概算要求の調整も行った。

2013 年度は主に第 1 室全体のグランドデザインを作っていく作業が中心となる。2012 年度はまだ明確ではなかった展示プランが 2013 年度以降の活動によってどのように明確化され，具体的な展示へ統合されていくのか。本稿のように，調査活動報告の形で随時報告していくつもりである。

引用文献

- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館．2004. 国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画．59 pp. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，佐倉市．
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館．2011. Gallery 1 第 1 展示室（原始・古代）．（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，編）．4 pp. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，佐倉市．
- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館．2013. 平成 26 年度概算要求にかかる運営上の諸課題等．（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，編）．46 pp. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，佐倉市．
- 藤尾慎一郎．2012. 総合展示第 1 室新構築について．「第 1 回展示プロジェクト委員会資料」．5 pp. 大学共同利用法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館，佐倉市．
- 平川南．2013. 開館 30 周年記念論文集刊行の辞．「国立歴史民俗博物館研究報告」第 178 集本冊 開館 30 周年記念論文集 I ．1-2. 国立歴史民俗博物館．2013. 国立歴史民俗博物館開館 30 周年．（国立歴史民俗博物館，編）．12 pp. 国立歴史民俗博物館，佐倉市．

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2013 年 4 月 24 日受付，2013 年 9 月 18 日審査終了）